

日本の予選通過が絶望となった現在、国内でのFIFAワールドカップ・ドイツ大会への熱気は一気に低下してしまっただが、世界は七月の決勝まで四年に一回の大騒ぎである。現在の日本のサッカーの流行は一九九三年にJリーグが発足して以来の急造かつ促成のものであるが、世界ではサッカーは千年以上の歴史と伝統のあるスポーツだからである。

まずサッカーという言葉が日本の実状を象徴している。世界でサッカーという言葉が通用するのはアメリカのみで、本家のイギリスをはじめフランスもスペインも発音に多少の相違はあるもののフットボールである。イタリアが自国の優位を主張してカルチョ、中国が独自の中華思想で足球（ズージュウ）を使用している以外、世界のほとんどの地域で通用するのはフットボールというスポーツなのである。

日本では最近でこそ若者が将来希望する職業で野球とサッカーは互角であるが、世界全体では野球はきわめて地域限定のスポーツである。サッカーの国際組織FIFAに加盟している国数は二〇七であるが、国際連合の加盟国数が一九一であるから、その関心の度合いが推定できるし、設立もFIFAの一九〇四年に比較して国際連合は一九四五年、その前身の国際連盟が一九二〇年であるからサッカーの歴史を象徴している。

そして野球といえば、国際野球連盟（IBAF）は一九三八年の設立で参加国数も一一〇と大差である。FIFAによると、サッカーの競技人口は二億五〇〇〇万人であるが、野球は一五〇〇万人といわれ、まさに桁違いである。今年になってワールド・ベースボール・クラシックが開催され、野球も国際社会を意識しはじめたが、その一方、二〇一二年のロンドン・オリンピック大会以後は競技種目から除外される。地域限定たる由縁である。

さらにサッカーの世界への浸透を明示する数字がある。一九九六年のアトランタ・オリンピック大会のテレビジョン中継の視聴者数は一九六億人であったが、四年のワールドカップ・アメリカ大会は三二億人であった。これは偶然のことではなく、二〇〇〇年のシドニー・オリンピック大会と九八年のワールドカップ・フランス大会を比較すると、二二六億人と三三四億人で、やはり大差である。

そしていくつかの国々ではサッカーは国家の状態を反映したものになっている。今回の日本の対戦相手であるクロアチアは現在でもクロアチア民族とセルビア民族の対立が残存しており、選手の選抜も微妙であり、それが日本に有利に作用すると期待されていたし、反対に三〇〇近い民族が四〇〇近い言語を使用して生活しているナイジェリアでは、サッカーのみが国家が一丸となれる行事だともいわれている。

さらにサッカーは国家同士の代理戦争といわれ、前回の日韓大会ではアルゼンチンとイングランドが予選で同一グループとなり、熾烈な試合をしたが、これは八二年も両国が実際の戦闘をしたフォークランド戦争の因縁試合と理解されている。そして六九年にホンジュラスとエルサルバドルの南米大陸予選での試合から二週間後には両国は本物の戦争に突入した。以前から紛争の火種があったものの、サッカーが点火したのである。

その一方で、二〇〇一年にはサッカー自体をノーベル平和賞受賞者にしようという提案があった。古代オリンピックが停戦のために実施されたように、現代のサッカーは各国の関係を円滑にする役割もあるからである。このように単純なスポーツ以上の存在となっているサッカーの背景を理解しながら観戦すると、一層興味のある時間を体験できるはずである。